

# 令和元年度 旧松山管内 生徒指導夏季研修会 実施報告書

1 日 時 令和元年7月29日(月) 13:30~15:30

2 場 所 松山市青少年センター3階 大ホール

3 講演内容

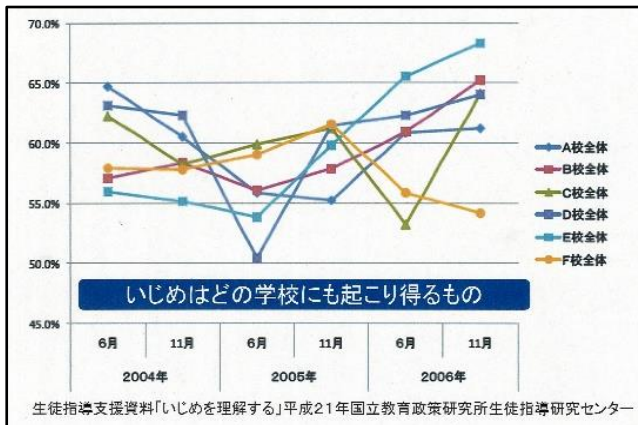
- ・ 演 題 「サイクルで進める生徒指導」
- ・ 講 師 愛媛大学 大学院教育学研究科 教育実践高度化専攻 教授 城戸 茂 氏

## (1) 生徒指導とは

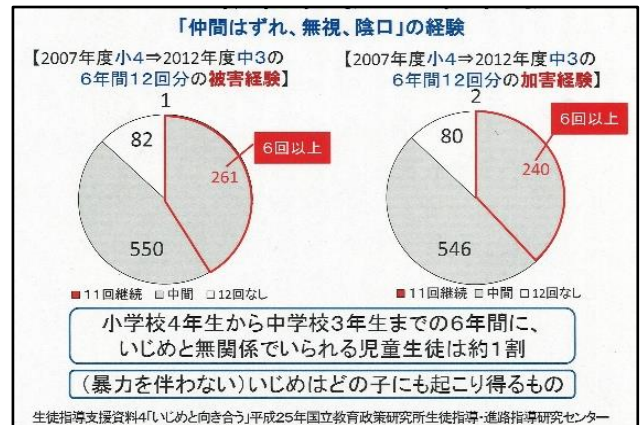
生徒指導提要によると、生徒指導とは、「すべての児童生徒を対象とし、学校の教育活動全体で実施することで、自己指導能力の育成を図る。」ものである。

生徒指導は、次の三つに類型される。①成長を促す指導（開発的な生徒指導、健全育成）②予防的な指導（問題行動等の未然防止）③課題解決的な指導（治療的な生徒指導）。いじめはどの学校にも、どのクラスにも、どの子どもにも起こり得る。（表1、表2参照）だから、全ての児童生徒を対象とした成長を促す指導が大切である。

<表1 仲間はずれ、無視、陰口の経験率>



<表2 いじめの被害経験・加害経験>



## (2) 問題行動等の未然防止と成長を促す指導（授業の中で行う生徒指導）

ア 学習指導要領総則の解説には、「学習指導と関連づけながら、生徒指導の充実を図ること」と示されている。また、中教審の答申では、学習指導において、「児童生徒理解」「自己存在感」「信頼関係」「人間関係づくり」「自己選択」「自己決定」が重要になってくると示されている。学習指導と生徒指導を分けて考えるのではなく、学習指導と関連させながら行うことが大切になってくる。

### イ 授業の鉄人のVTRより

鉄人の授業から分かる生徒指導充実のための三つのポイント

- ① 児童生徒に**自己存在感**を与える。
- ② 教師と児童生徒の信頼関係及び児童生徒相互の**共感的な人間関係**を育てる。
- ③ **自己決定**の場や機会をより多く用意し児童生徒が自己実現の喜びを味わうことができるようにする。

良い授業は教科の方面でも生徒指導の方面でも素晴らしいものになっている。教科の論理と生徒指導の論理がバランスよく入っている。初任者の授業を見ると、教科の論理に傾斜したものが多く見られる。バランスが大事ということを忘れてはならない。（分かる授業→成長を促す指導がキーワード）

(3) サイクルで進める生徒指導の考え方 ～成長を促す指導を効果的に進めるために～

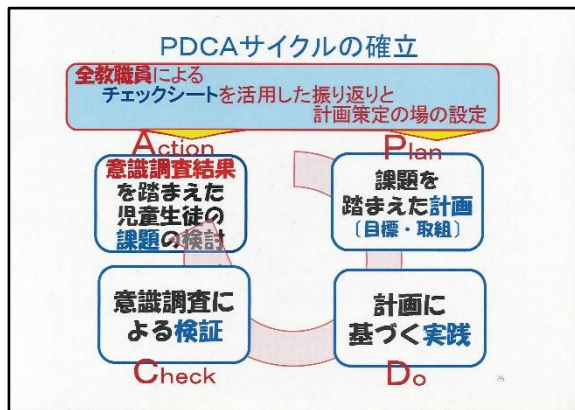
ア **サイクルで進める生徒指導**とは、全教職員による共通実践の徹底を図るために、全教職員の話し合いの場を重視した、PDCAサイクルで進める生徒指導である。全教職員によるチェックシートを活用した振り返りと計画策定の場を設定することが大切である。(図1参照)

イ サイクルで進める生徒指導の考え方

- (ア) 問題行動対応に特化した取り組みには限界がある。
- (イ) 様々な問題行動の要因は共通する部分も多い。それらの要因は、健全育成を進めることで改善が期待できる。
- (ウ) 健全育成には、すべての児童生徒を対象に**すべての教職員**で取り組むことが重要である。
- (エ) **すべての教職員**による共通理解や共通実践を進めるうえで、サイクルで取り組むことは効果的である。客観的データに基づいた計画立案のプロセスにすべての教職員が参画することで確実な共通理解や共通実践を図ることを重視した取組である。

ウ サイクルで進めるためのポイント

データ（児童生徒を対象とした意識調査等）に基づいた全教職員の話し合いの場の充実を図る。そのために、児童生徒を対象とした意識調査の結果を、共通実践を進めるための指標として設定したり、意識調査結果を基に、チェックシートを活用して関係するすべての教職員で一連の取組を振り返る場を設けたりする。(図2参照) 振り返りの場では、成果と課題を明らかにした上で、改善策を検討し、具体的な手立てを明確にしていくことを通して、共通理解を深める。



<図1 PDCAサイクルの確立>

チェックシートの例	
1 「目標」は、期待通りに達成されたか？	
<input type="checkbox"/>	十分に達成された
<input checked="" type="checkbox"/>	期待ほどではないが、達成された
<input type="checkbox"/>	あまり達成されなかった
2 期待通りに達成されなかった原因はどこにあるか？	
(1) 「課題」の設定について	<input type="checkbox"/> 適切 <input type="checkbox"/> 不適切
(2) 「目標」の設定について	<input checked="" type="checkbox"/> 適切 <input type="checkbox"/> 不適切
(3) 年間計画の策定について	<input checked="" type="checkbox"/> 適切 <input type="checkbox"/> 不適切
(4) 年間計画に沿った実施について	<input checked="" type="checkbox"/> 適切 <input type="checkbox"/> 不適切
(5) 「目標」を意識した「取組」の実施について	<input checked="" type="checkbox"/> 適切 <input type="checkbox"/> 不適切
(6) 教師の取組状況について	<input checked="" type="checkbox"/> 適切 <input type="checkbox"/> 不適切
(7) 「取組」事項における児童生徒の活動状況について	<input type="checkbox"/> 適切 <input checked="" type="checkbox"/> 不適切

<図2 チェックシートの例>

演習として、A中学校2年生のアンケート結果を基に「1学期の成果と課題を明らかにする。」「改善を検討し、2学期に意識する具体的な手立てを明確にする。」という二つのポイントに絞ってペアで協議をし、全体で確認した。<写真1>

参加者の代表からは、「成果として、学校生活を楽しんでいる生徒が8割を超えている。」「課題として、学校生活を楽しんでいる生徒が4%から7%に増えている。」「授業に主体的に取り組んでいる児童が減っている。」といった意見が出された。



<写真1 ペアでの話し合い>

エ サイクルの基本的な流れ

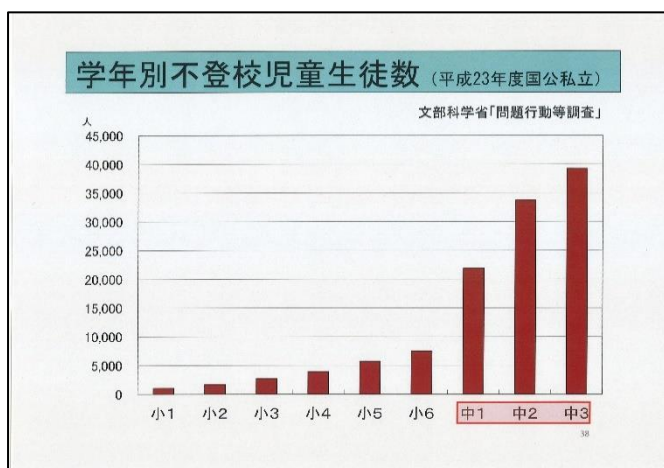
- (ア) 意識調査結果等のエビデンスに基づき、改善すべき「課題」を設定する。
- (イ) 「課題」を踏まえ、育成を目指す児童生徒の姿を示す言葉で「目標」を設定する。
- (ウ) 「目標」を実現するために必要な「取組」（いつ何を、どのように…）を選定し、年間計画を策定する。
- (エ) 年間計画に基づき、全教職員による共通実践を進める。
- (オ) 一定期間終了後（各学期末が考えられる）、年間計画に基づき意識調査を実施する。
- (カ) 調査結果を踏まえチェックシートを各学年部、各学校全体、（中学校区）の順で関係する全教職員で「目標」の達成状況を検証する。
- (キ) 検証結果を踏まえ、「課題」「目標」「取組」を見直し計画を修正する。
- (ク) (イ)～(ク)を繰り返す。

(4) サイクルで進める生徒指導の実際 ～成長を促す指導による不登校の未然防止～

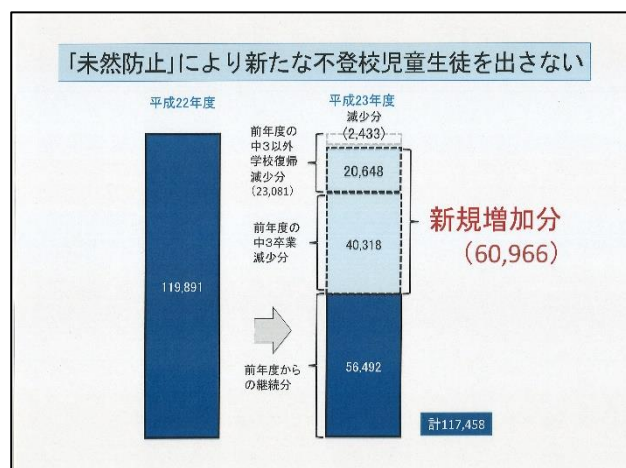
ア 国立教育政策研究所事業（平成 22 年度より実施）「魅力ある学校づくり調査研究事業」

小・中学校が連携し、開発的な生徒指導（「授業づくり」や「集団づくり」）を通して、不登校の未然防止を目指す。＜表 3、4＞

＜表 3 学年別不登校児童生徒数＞



＜表 4 不登校の未然防止＞



イ 魅力ある学校づくり調査研究事業

目的：不登校の未然防止  
 指定地域： 1 中学校区内の全小中学校（第 I 期は 30 地域）  
 取組内容： すべての児童生徒を対象とした、「心の居場所」となる学校づくり、「絆づくりの場」となる学校づくり  
 仮説： 意識調査結果の肯定的な回答が増加すれば、新たな不登校（長期欠席）児童生徒数は増加しないだろう。  
 意識調査の共通項目

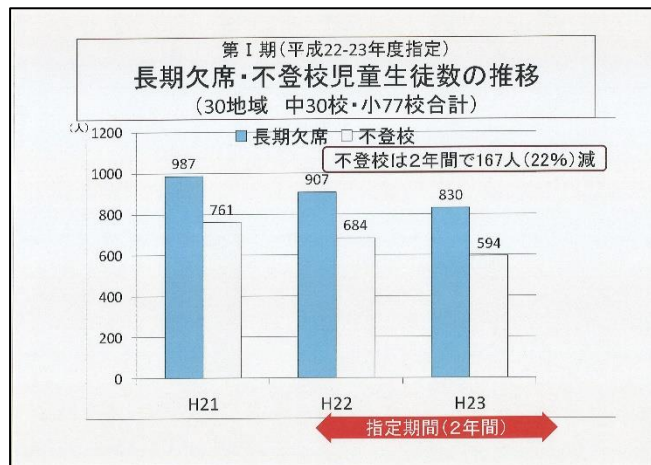
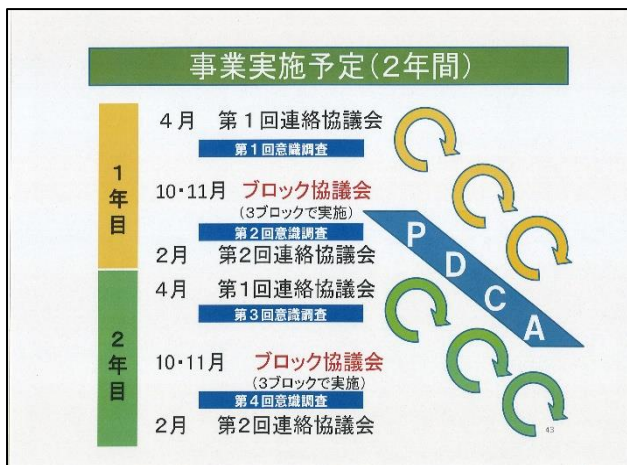
ア 学校が楽しい イ みんなで何かをするのは楽しい ウ 授業がよく分かる

中 1 時不登校のきっかけ（経験なし群）は、友人関係、学業不振が主な理由であるから、学校が楽しいと感じられれば、改善が図れ、新規の不登校児童生徒は減るだろう。

2 年間の事業実施予定を次のように計画し、取り組んだ結果、長期欠席は 2 年間で 157 名（約 16%）減、不登校は 2 年間で 167 名（約 22%）減となった。＜図 3、表 5＞



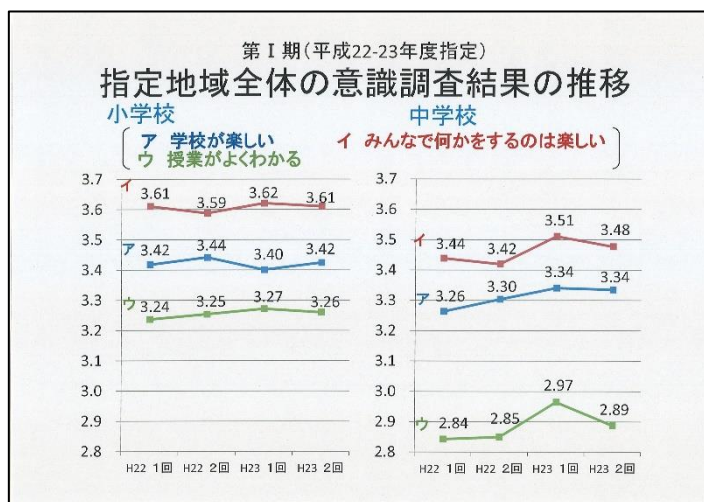
<表5 長期欠席・不登校児童生徒数の推移>



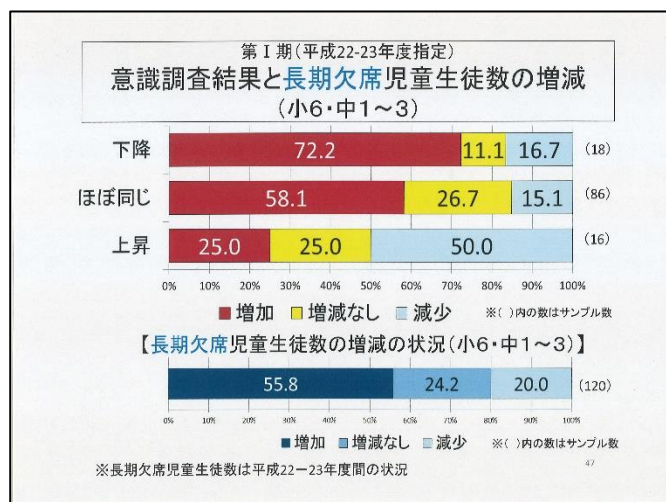
<図3 事業実施予定>

不登校の出現率を見ると、指定地域の小学校は、全国とあまり変わらないが、中学校は全国より大きく下がった。「指定地域全体の意識調査の結果の推移」及び「意識調査結果と長期欠席児童生徒数の増減」を見ると、意識調査が下降、ほぼ同じ学校群と比べ、上昇している学校群は、新たな長期欠席児童生徒が出にくいという結果が得られた。<表6、7>

<表6 指定地域全体の意識調査結果の推移>



<表7 意識調査結果と長期欠席児童生徒数の増減>



第Ⅲ期の調査研究事業では、不登校の未然予防に加え、いじめの抑制についても調査した。(指定地域数 18 中学校区(中 18 校・小 56 校)) PDC Aサイクルを3回行った結果、新規不登校数が、約3割減少した。また、いじめの被害・加害の抑制にもつながった。

ウ 小・中連携について(健全育成の取組)

積極的に授業公開を行うことで、授業力の向上を図った。小・中共通の授業参観シートを活用することで、視点をしっかり持って授業参観をすることができ、研修が深まった。

また、小・中合同でボランティア活動、合同合唱コンクールなどを行い、交流を深めた。中学生が、小学校低学年の世話をすることで、自己有用感の高まりも見られた。

〔成果が見られた学校での取組例〕

(ア) 9年間の発達の段階を踏まえた「学び方の基本」の作成と各教室での掲示による意識化

<図4>

(イ) 取組成果を可視化（グラフ化等）して共有

(ウ) 分かる授業づくりを進めるための評価指標の作成

(エ) 生徒による授業評価の実施

(オ) 授業改善に向けた小・中共通のテーマ設定

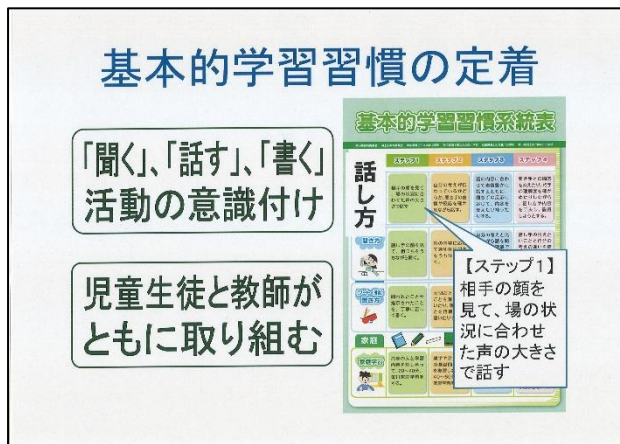
(カ) 授業研究を踏まえ、児童生徒の実態に即した研究の方向性の確認、共通理解

(キ) 各学校との連絡調整を重ねることを通しての教員相互の人間関係の構築

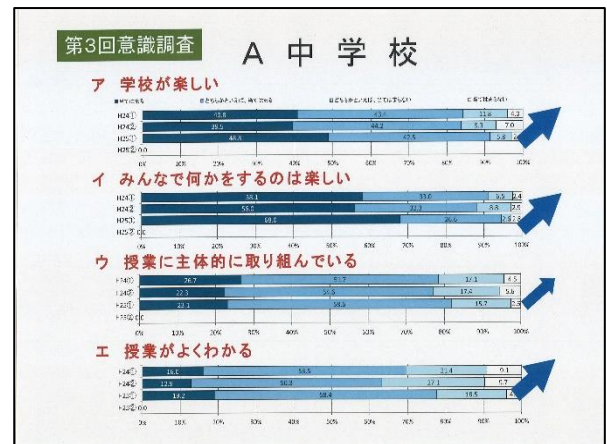
以上の取組から、児童生徒の学力や学習意欲の向上、欠席児童生徒数の減少、問題行動等の発生件数の減少、異なる考え方にも耳を傾けようとする態度の定着などの成果も見られた。

<表8>

<表8 意識調査の結果>



<図4 学び方の基本モデル>



課題としては、成長を促す指導は、成果が見えにくいことである。「何を」「どのように」「なぜ、そうするのか」について共通理解を図り、意識調査結果等を手掛かりにしながら共通実践の徹底、継続をしていくことが大切である。

(5) 問題行動等の発生を抑止する魅力ある学校づくりのポイント

- ア 成長を促す指導を意識した「授業づくり」と「集団づくり」に、全教職員で取り組む。
- イ 一人の百歩より百人の一步を大切にする。
- ウ 生徒指導をP D C Aサイクルを進める。
- エ 義務教育9年間で子どもを育てる。

キーワード「サイクルで進める生徒指導」